

## “Morton Hall”における Gaskell の名門意識批判

越川 菜穂子

### Mrs. Gaskell's Criticism on the Sense of Genteel Family in “Morton Hall”

KOSHIKAWA Naoko

#### (1)

「モートン・ホール」(“Morton Hall”, 1853) は研究家がさほど注目しない短編小説であるが、ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) は “the best of all my small tales” (*Further Letters* 134) の六篇のうちにこの作品を入れている。彼女がこの作品が気に入っている理由は、なぜ飢えている叔母と甥の物語を書いたのかというハサートン (Lady Hatherton) からの問いに答えた手紙から推測できそう。

この手紙でギヤスケルは、「モートン・ホール」の物語はブロンテ家の召使で九三歳のタビサ・エイクロイド (Tabitha Aykroyd) が書いた文に依拠していると告白している。タビサが娘のころ、ハウスに財産のある未婚の女がいて、青いサティンのガウンを着て贅沢な四輪馬車を乗り回していたが、ギャンブルで財産を失った甥に頼まれて金を貸し、二人とも無一文になって行方不明になり、邸は崩れ落ちてしまった。村人たちは彼らが飢え死にしたと噂していたが、あるとき甥が金に換えられそうな古い皿を持って地主を訪れ、叔母を埋葬するための資金がほしいと言った。この話についてギヤスケルは、“The ‘blue satin gown’ and the ‘clemming to death’ were a striking contrast, were they not?” (*Further Letters* 105) と書いている。彼女は、この「著しい対照」(“striking contrast”) を活用した短編小説を書こうと決めたのである。

十九世紀には中産・下層階級に読者層が広がり、定期刊行物に掲載される娯楽的な読み物の需要がふえた。これについてバシガルボ (Marie Bacigalupo) は、“Sentiment and sensation became fictional decider as the periodical press appealed to a late wave of jaded romanticism.” (Bacigalupo 172) と説明している。ギヤ

スケルが中・短編小説で “exciting incidents” を語るのはいくつかの時代の影響だといわれるが、「モートン・ホール」はこの影響が著しい作品である。

ギヤスケルはタビサの文に「著しい対照」を感じたと書いているが、「モートン・ホール」には「栄華」と「餓死」の他にも、王党派と清教徒、村落と都市ロンドン、今と昔など、さまざまな「対照」がある。研究家たちがこの作品を重視しないのは、ことによると作者がコントラストの効果を意図して三つの話を無理につなぎ合わせたため、全体の統一を損なう結果になっているからだろう。

華やかなガウンと餓死との対照はだれにも「滅び」、しかも繁栄からの急激な滅亡の比喩ととれる。実際にギヤスケルは、清教徒革命によるモートン家の衰亡を始め、清教徒カー父娘、およびその後モートン・ホールを継いだ二つの家族という歴代四家族の「滅び」を語っている。しかし読者は、いずれの物語にも運命の悲惨な進展に興味はひかれるが、「滅び」にともなう哀切さはさほど感じない。それは、彼らが死ぬ日まで虚栄心をもち続けているからである。そしてこの虚栄心の根源はモートン・ホールにあり、この邸に住んでいることが彼らに災いするのである。このような意味で、これは名門意識にとらわれることを戒めた短編小説だと言える。アナベラ (Annabella) は家族の名門意識のために愛による結婚が果たせなかった犠牲者であるから、またコーデリア (Cordelia) は、自分はモートン家に属していないという自覚をもっているから、死を免れる。

#### (2)

サー・ジョン (Sir John) は、しばらくこの邸に住んでいた清教徒リチャード・カー (Richard Carr) の

娘アリスをみて“*She was a beautiful woman to be tamed, and made to his beck and call.*” (MH 172) だと見抜き、従順な彼女と結婚すれば、彼女の所有する邸を難なく自分のものにできると判断する。またジョンは騎馬兵をつれて邸へ帰ってくる際に、アリスが精神異常者であると言いつらしておき、彼女に異様な衣装を着せて馬に乗せ、村人の衆目にさらすことによって、自分の行為を正当に見せかける。アリスは夫を恨んで、モートン家の家系の者は死に絶え、邸は倒壊し、その後には「小商人風情」(“*peddlers*” MH 177) が住むことになると宣告し、苦悩の末に精神異常になって荒野で行き倒れて凍死する。ジョンの無情な性格や、アリスの激しい苦悩による精神異常の描写など、ゴシック・ロマンスを思わせるところが多くある。

ギヤスケルがこのような作風の短篇小説を書いたのは、前述のように当時の読者層の好みに応えるためだったと考えられるが、作者に内在する無意識的な理由として、マリアンヌ・カミュ (Marianne Camus) が述べている「女に特有な歴史観」に注目すべきだろう。カミュによれば、男と女では歴史観がちがう。彼女の論を大胆に要約すれば、男にとって、歴史は社会を進展させてきた事象が線的に連続している「過去」である。いっぽう女にとって歴史とは、幼いころに母や祖母の膝のうえで聞いた「お話」である。これは女親から娘へと循環していく「時」であり、繰り返してあるから、「現在」も古い時代に停滞したままである。カミュは、女のこのような歴史観について、“*As to the present, it is heavy with the weight of a past which one could call archaic, on the fringe of History, a past which is in fact the collective memory of the inevitable phases of human life. This is the past that permeates Gaskell’s stories.*” (Camus 175-6) と述べている。これはギヤスケルの懐古的な傾向についての的確な説明になっている。このような歴史観、あるいはむしろ歴史感覚と呼ぶべきものは、ギヤスケルの中・短篇小説の女性の語り手に共通して認められる。女性の懐古談には、男への隷従のもとで鬱積してきた悔しさがこもっている。だから、彼女たちの〈思い込み〉が現代の私たちには迷信に近いように感じ取れるにしても、カミュはそこに経験による知恵があるとしたうえで、“*They (Such examples of popular wisdom) express an understanding and intuition of psychological influence which we all accept today, dressed as they are in learned names.*” (Camus 176) という見解を述べている。彼女は、女に特有の歴史感覚がこのような知恵を醸成したと考えている。

「モートン・ホール」の語り手ブリジエット (Bridget) は、男性とは違ったこの歴史感覚で語っている。このように考えると、カミュは、これまでは懐古趣味として批判的な目で見られがちであったこれら一連の短篇小説への再評価を促していることになる。

ギヤスケルは意図していなかっただろうけれども、当時の女たちの潜在意識の一面を私たちに提示しているのである。

### (3)

この作品は、革命以前のモートン家の小作人の娘であるブリジエットが清教徒革命以降の三代にわたる居住者たちについての回想を語るという形式である。ただし彼女の子ども時代のサー・ジョンとアリスのことは、モートン家の家政婦であったミセス・ドーソン (Mrs. Dawson) からきいたことをブリジエットが語るという形式になっている。

モートン・ホールには、清教徒革命によってほんのしばらく清教徒のリチャード・カーとその娘であるアリスが住む時期を除いて、モートン家系の人たちが住む。作品は三代の家族の三つのエピソードから成り立っているが、その全体のなかで結婚を望む女性が四人登場し、そのうちの二人が結婚し二人は諦める。一人目のアリスはジョンとの初対面の際に彼を愛したとミセス・ドーソンは語るが、なぜ愛したかという説明はしていない。王政復古後、清教徒たちは土地を追われていたため、アリスも邸を引き渡さねばならなかった。しかし、王党派のジョンと結婚すれば、引渡しを逃れることができると考えた。要するにアリスは、清教徒革命の際に買った邸に亡父が愛着をもっていたので、それを他人に渡したくないためにジョンと結婚したのである。ミセス・ドーソンはモートン家の元家政婦であるから、終始ジョンに好意的な判断をして語っていると推測しなければならない。彼女はロンドンの宮廷でジョンが不貞を犯すのは、彼が結婚してくれたことについてアリスが感謝を示さなかったからだと言って、罪を彼女に負わせている。これは元家政婦の、モートン家への忠実さにもとづく偏見であろう。けれども、アリスにとって亡父が「この世でただ一人の、真の愛人であり友達であった」(“*the only true lover and friend she had ever had on earth*” MH 174) というのは真実であり、彼女はモートン・ホールに住み続けるために打算的な結婚をしたのである。

二人目のミス・フィリス (Miss Phillis) は、兄の家

事手伝いを続けるために結婚をあきらめる。三人目のアナベラは美貌であったために母と姉たちから家柄や財力のある男と結婚するように期待をかけられ、恋人との結婚を断念しなければならなかった。四人目のコーデリア (Cordelia) だけが、自由で幸せな結婚をする。

最初のアリスの打算的な結婚と結末のコーデリアの愛による結婚とが対照的に語られていて、これも「著しい対照」だと言えよう。後者の幸福の証として彼女は女の子を生む。これら二つの結婚話の間に挟まれるようにして語られているミス・フィリスとアナベラは、結婚はしないが、作者の結婚観を考えるうえでは無視できない。家事や家族の介護役を果たすために結婚をあきらめる話はギヤスケルの他の短編小説にも登場するが、アナベラが家族の名門意識の犠牲になった点には注目すべきである。

ブリジェットと妹のエセリンダ (Etherinda) も、名門意識をもっている。エセリンダはコーデリアの婚約者の先祖がモートン・ホールに住んでいたことがあると聞いたときに、“Has he got ancestors? That’s one good point about him, at any rate. I didn’t know cotton-spinners had ancestors.” (MH 202) と言う。婚約者への親近感を語っているのではあるが「紡績商人にご先祖があるとは知らなかったわ」ということで、エセリンダは思いがけず名門意識を暴露してしまっている。

#### (4)

アリスの父はモートン・ホールに住むようになって間もなく死亡する。次の物語のミス・フィリスは三十過ぎで父と死別する。ジェネラル・モートン (General Morton) はロンドンで生活しているために、モートン・ホールで幼いコーデリアが二人の叔母たちから偏った教育を受けていることに気がつかない。三つの物語の共通点は、頼りになる保護者が束の間しか顔を出さないか、死んでしまうかだということである。これが扶養を必要とする人物たち、具体的にはアリス、ミス・フィリスおよびコーデリアに共通する不幸の原因である。

スクワイア・モートン (Squire Morton) の没後、世継ぎであるジョンは叔母のミス・フィリスを頼りにすることになるが、同居している独身の叔母は、一般の概念では家族ではなく親族にすぎない。この叔母と甥とは深い愛情によって家族として生活するが、二人とも生活力は皆無である。この二人と対照的に、次の代

のジェネラル・モートンの姉妹は経済的には心配がないけれど、仲はよくない。心の優しいアナベラは、打算的な結婚に応じなかったために姉のソフロニア (Sophronia) と妹のドロシー (Dorothy) から酷い扱いを受けている。家族内では弱い立場にいますが、印度で亡くなった妹ジェーン (Jane) の遺児であるコーデリアを可愛がる。コーデリアが理不尽な二人の叔母たちのことをロンドンにいる保護者の叔父に訴えようとするが、ブリジェットが諫め、先代のミス・フィリスが苦境で我慢強かったことを話してきかせたので、コーデリアは子どもながら賢明に判断し、おそらくは家族関係が破綻することを危惧して叔父に訴えることを諦める。もし彼女が実情を訴えていたら、結果的にはコーデリアとアナベラは別居を余儀なくされ、先代のジョンとミス・フィリスのように飢餓の危険にさらされる運命となったかもしれない。コーデリアはその後もモートン・ホールでつらい境遇に耐えながら、成長していく。この苦しい成長の過程で、カミュが言う女に特有の歴史感覚がコーデリアに浸透していったとすれば、それは、幼い彼女を膝に乗せて育てた母や、結婚問題で家族の犠牲になってしまったアナベラを通してであろう。

この短編小説で語られている幾つかの家族には、家長が不在であること、家族のなかで弱い立場の者が優しいこと、無力な家族構成員同士が助け合うことなどの共通点がある。もっとも、経済的に恵まれない者の間で家族的な愛情が醸成されるのは、ギヤスケルの筋立ての常道ではある。

語り手のブリジェットは、スクワイア・モートンの十歳の息子が、昔アリスと結婚して若死にしたジョンと同じ名前であることを不吉だと感じ、“I used to wish he might not bear that ill-omened name.” (MH 178) と語る。また上述のようにブリジェットは、ミス・フィリスのことをコーデリアに話してきかせる。ギヤスケルはミス・フィリスとジョンとの叔母・甥の関係とアナベラとコーデリアとの叔母・姪の関係という二組の三親等間の愛情を繰り返して語ることによって物語の構成をパターン化し、家族感情は親子間に限らず、家族のなかで脇役にすぎない構成員の間でも醸成されることを訴えようとしているのである。四人姉妹のうちで、優しいアナベラと末妹のジェーン (Jane) の遺児コーデリアだけが死なないで、コーデリアが結婚するとアナベラも同居して幸せな家族の一員となる点にも、血縁にこだわらないという作者の家族観がうかがえる。

姪を愛するアナベラやコーデリアを諫めるブリジェットには、「理性」というよりもむしろ「分別」と言うべき思慮深さがある。男なら単純に理屈で判断し、利害に傾くことだろう。この「分別」は女たちが男への隷従のもとで蓄えてきた叡智であり、カミュがいう「女に特有の歴史観」と重なり合うように思える。

男性や地位のある女性が自分の一存でことを決めてしまうと、弱い立場にいる女性は沈黙を強いられ、強者の単純な理屈に従うより他に方法はない。彼女たちは強者の方針の枠内で思慮を働かせて、破局を回避する秘かな努力をしなければならない。

このような厳しい境遇の女性たちの間では、黙従を強いられているなかで深い共感が醸成される。無力であることを自覚している人に、同じく無力な人がさし延べる救いは、受ける側には大きな支えになる。そこには、強者が弱者に差し延べる救いにはない深い感情の交流があるからだ。アナベラは、姉たちの監視を気にしてコーデリアに話しかけることさえ控えなければならなかったかもしれないが、コーデリアにとっての大きな支えであった。この共感ゆえに、たとえ窮境を脱することはできないとしても、耐えきることができる。彼女たちは理知的ではないから、過酷な境遇に耐える手段として理屈に合わないジンクスや迷信をつくりあげるだろうし、ブリジェットのように自分を低い身分だとみる固定観念に甘んじているだろうが、つらい経験のなかで、直感的な予測の能力をたくわえていく。このような処世観はヴィクトリア朝時代においてさえ、すでに時代おくれなものであったかもしれない。けれども、苦境に耐えて時期の到来を待つアナベラやコーデリアは、聡明な弱者である。

### (5)

モートン・ホールは、名門意識の象徴である。モートン・ホールに住む者は、名門意識による虚栄心のゆえに正常な生活から逸脱していく。清教徒であるリチャード・カーでさえ、革命の恩恵でこの邸に住めることを誇りとした。アリスに関する“... it was a great honour for her father's daughter to be wedded to a Morton.” (MH 173) というのは、語っているのがモートン家びいきのドーソンであるから、ジョンの側に傾いた意見であるという点を割引いても、アリスにも名門意識があったことが推測できる。

ミス・フィリスは、殊に名門意識が強かった。彼女とジョンは小舎の裏の空き地で野菜を栽培し、辛うじ

て食料を得ている。その肥料にするために路上の馬糞を拾うが、家柄の誇りを捨てることができないから、人目を避けるために夜明け前に拾い集める。またこの野菜づくりについてミス・フィリスは、ジョンが農業に興味をもち、栽培の実験をしているのだとブリジェットに話す。叔母と甥が名門意識にとらわれているこの姿は、滑稽で哀しい。二人が飢餓に瀕しているのを見かねて、ブリジェットはある日の夜明けに二人が住む小舎の入り口に鶏卵を置いておく。けれども、翌朝早くブリジェットは卵が小舎のまへの路上に投げ捨てられているのを見る。

けれども、やがて露命をつなぐために虚栄を捨てなければならなくなる。ある日ミス・フィリスは、ブリジェット姉妹の小舎へ食べ物を乞いにくる。最後にはミス・フィリスが甥のために食物を乞い、彼よりも先に餓死する。ここには、甥に対する叔母の家族愛の強さが窺える。

ギャスケルは三つ目のエピソードで、モートン姉妹によって名門意識への偏執を時代錯誤として戯画的に描いている。三人三様の生活の絵模様は、名門意識の影響によって決まっている。ドロシーは、姉の葬式を派手にやりたいと思い、ブリジェットに頼んで村人たちに参列してくれるよう声をかけてもらうが、二十人ばかりがやってきただけで、そのなかには報酬を要求する者さえいた。やがてドロシーはこの邸内で死ぬ最後の人として世を去る。モートン・ホールの三代にわたる継承者たちは、アナベラとコーデリアを除いて、すべて邸内かドラムブル (Drumble) の村で死ぬ。

インドで死亡したコーデリアの両親はモートン・ホールでの居住経験がなかったから名門意識にとらわれずにすんだのであり、コーデリアはその遺児であるからモートン・ホールの〈呪い〉、具体的には清教徒のアリスの宣告を免れたのだと解釈できる。

### (6)

モートン・ホールの家屋は、居住者が変わるとに模様替えされる。これは、時代の移り変わりを読者に印象づける。ブリジェットとエセリングダは、ジェネラル・モートンがモートン・ホールの所有者になったときに邸内の模様替えをしてしまったのを見て失望したが、新しい住民となるモートン家三姉妹について、エセリングダは姉に“After all, these three ladies are Mortons. We must not forget that: we must go and pay our duty to them as soon as they have appeared in church.”

(MH 190) と、モートン家への忠誠を語る。しかし最後には、コーデリアと結婚したマーマデューク・カー (Marmaduke Carr) がモートン・ホールを壊して Carr Street という道路にしてしまう。

コーデリアがエセリングダから小遣いにもらった六シリングで村の女の子を買収して遊びの仲間に入れてもらっているのを見て、語り手のブリジェットがモートン家の子が下賤な子と遊ぶのはよくないと注意すると、コーデリアは「私はマニスティ家の子よ！」(“But I am a Mannisty, ma’am!” MH 195) と反駁する。これは、自分がモートン家の子ではなく、亡くなった両親であるマニスティ (Mannisty) 家の子だという宣言である。また、女の子にお金を与えたことに関しては「私の意志で彼女にあげたのよ」“I gave it to her quite of my own self.” (195-6) と言って、自分の行為への干渉を拒む。この少女が、モートン家の家系の人としては名門意識にとらわれない初めての人物である。少女によるこの名門意識否定の宣言が、二人の叔母たちの反面教育の結果であるのは皮肉でおもしろい。

モートン・ホールを買った工場主のカーは、清教徒革命の時代にこの屋敷を買ったカーの子孫である。彼がモートン家のコーデリアと結婚することによって二つの家系が一体化し、新しい家系が誕生する。古い貴族主義と新しい中産階級意識とが和解するこの幸福な結末は、新旧の調和という作者の価値観を暗示している。ブリジェットはコーデリアが生んだ女の子を夫のカーがフィリスと名づけたことを喜び、“Phyllis Carr! I am glad he did not take the name of Morton, I like to keep the name of Phyllis Morton in my memory very still and unspoken.” (MH 203) と語る。ブリジェットは名門意識を捨ててしまっただけではないけれども、新しい家系にはアリスによる呪いが及ばないことを感じて安心しているという推測はできそうだ。

(7)

貴族や富豪の家系を歴史的に追う物語は、衰亡あるいは滅亡で終わるとするのが定型である。だから、本章の初めに紹介した「青いサティンのガウン」と「餓死」との「著しい対照」(“striking contrast”) は、読者に悲劇的な物語展開を予想させる。「モートン・ホール」の結末も、邸に関する限りはいま述べたように取り壊されるから「定型」通りである。けれども、アリスの呪いがモートン家のミス・フィリスと甥を餓死させたことによって帳消しになるという筋書きにより

〈女の怨念〉が強調して語られているから、叔母と甥による貴族の衰亡という「定型」の印象は薄らいでしまう結果になっている。家系に関しては、カー家とモートン家とが婚姻によって融和するという幸福な結末になっているから、この点でも「定型」をはみ出している。

ブリジェットの先祖は、ドランブルの地で三百年以上も昔からモートン家の借地人として生活してきた。清教徒革命以前に同家の借地人の家族の娘だった彼女たち姉妹は、王政復古後に移り住んでくるモートン・ホールの居住者たちが、自分たちの先祖が仕えたモートン家とは遠縁 (“distant cousin”) にすぎないのに、彼らに対して非常に忠実である。彼女たちは餓死寸前のジョン・マーマデュークにさえ礼儀正しく臨み、ミス・フィリスとジョンの死後はホールの荒れ果てた花園の除草作業に精を出す。またミス・ソフロニアがお茶に招待してくれたときには、その光栄を村人たちに見せびらかしたいと思う。こういう身分意識を作者がどの程度まで肯定していたのかはともかくとして、ブリジェットの忠実さが名門意識によるものであるとすれば、モートン家の家系のコーデリアが清教徒の商人と結婚することを彼女が喜び、モートン・ホールが取り壊されたことについての悲しみを感じないか、あるいは悲しむことを忘れてしまっているようなのは不自然である。けれどもこれを矛盾と感ずるのは、今日では廃れてしまった非科学的な歴史観、カミュが注目を促している「女性の時間としての循環的な時間」(“the idea of cyclical time as the time of women” Camus 175) が私たちには理解できないからだという解釈が成り立つのではないか。この循環的な時間の観念を内在しているブリジェットや作者のギヤスケルの女性特有の情緒的な生活感には、矛盾が矛盾として認識されずに共存できたと考えてよさそうに思える。

(8)

女性の語り手が過去に親しくしてきた人のことを懐古的に物語るという「時代後れの形式」にギヤスケルが執着していることについてカミュは、次のように書いている。

But this clinging to old forms can also betray a reluctance to abandon the discourses of a time when women had a real place in society. . . . the choice of using these discourses as well as the way they contradict other aspects of the narrative discourse—in

particular its insistence on reasonable dialogue—betray distract and even a feeling of malaise toward the dominance of a masculine type of discourse which encloses women in a vision of the world which is not theirs. (Camus 178–9)

カミュによると、女性が語る形式には、女が社会において実質的な地位を占めていた時代への愛惜であり、この物語形式が遠慮がちにしか使用されないのは、おそらく時代後れだという批判を懸念するからである。女が実質的な地位を占めていたのがいつの時代なのかカミュが述べていないのは、少なくともヴィクトリア朝時代の女たちの潜在意識には、理性あるいは合理的な思考ではなく、一時代まえの直感あるいは迷信的など呼んでもよい判断が通用するアルカイックな時代あるいは社会が、「過去」ではなく「現在」として存在しているからである。カミュはこの「時代後れ」な物語形式は社会に「父の流儀」（“paternal way”）とはちがった「母の流儀」（“maternal way”）が残存していることを読者に想起させる思慮深い方法であり、女家長的な文化の構築あるいは再構築を希求している点で、今日のラディカルなフェミニズムの最初の種を蒔いたと考えてよいと批評している。

「モートン・ホール」には、名門意識が理性をくぐった批判としてではなく、女の語り手の深い実感によって、滅亡や死を招来するものとして否定されている。名門意識についてのこのような感情的な否定は、男への隷従のもとで実質的には暮らしを取り仕切るな

かで女たちが会得した生活の知恵かもしれない。ブリジットは家柄を尊重するいっぽうで、家柄に拘泥することの危うさに気づいている。

女であり被害者であるアリスの怨念は痛恨きわまるものであったから、呪いの言葉は叶えられた。またマーマデューク・カーの結婚も、アリスにとって幸福な結末である。カミュの見解に従えば、彼女の怨念は語り継がれるうちに、女たちの生活感に組み込まれていくと考えてよい。これは、常に加害者の立場にいる男に関わりのないことである。富豪の家系を歴史的に追う物語は滅亡で終わるという定型に、「モートン・ホール」は今まで述べてきた意味ですっぱりと収まりきらない。土壇場で家族づくりの役を果たすのは女である。

#### 引証資料

- (1) Chapple, John & Shelston, Alan. (edited) *Further Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Manchester University Press, 2000. (このテキストからの引用は“Further Letters”の略語とともに頁数を括弧内に記す)
- (2) Bacigalupo, Marie. *The Short Fiction of Elizabeth Gaskell*. Missigan: UMI Dissertation Services, 2000.
- (3) Gaskell, Elizabeth. *The Moorland Cottage and Other Stories*, Oxford: Oxford University Press, 1995. (“Morton Hall”のテキストからの引用はこの版を用い, “MH”の略語とともに頁数を括弧内に記す)
- (4) Camus, Marianne. *Women's Voices in the Fiction of Elizabeth Gaskell (1810–1865)*, New York: Edwin Mellen Press, 2002.